

第4節 坂村真民先生との出会い

私は板野中学校に赴任する前年(1989年度の夏休み)、私の人間観を大きく変えてくれた出会いを経験している。それは愛媛県砥部町に住まわれている坂村真民先生との出会いである。真民先生は、愛媛県の公立高校の教師を退職された後、私立高校の教壇に7年間立たれ、その後砥部町のタンポポ堂と称されるお住まいで文筆活動をされている。

1989年度の夏休みも終わりに近づいた日、私は私の家族(妻と当時1歳7カ月の長女)を連れて、タンポポ堂(真民先生のお宅)を訪ね、真民先生から教師として、また人間としての生き方、あり方にかかわる話を聞かせていただいた。

真民先生は、私の大きな身体を見るなり、「あなたはその身体、その体力に感謝しなければなりませんね。そして、あなたは私のような体力のない教師の苦しみを知らなければならないし、私のような生徒、(かつて、真民先生は貧困の生活の中であって、人間不信、教師不信の中に学校生活を送られたと言われる)誰一人として教師を認めない、尊敬しない生徒のいることを知らなければならない」と話された。

そして、本当の教育を求めて50数年前に朝鮮に渡られたことなど、坂村先生自身が生きてこられた道りを通して、生きることの意味をしみじみと語ってくださった。

最後に「力の教育は本物ではない。子どもを管理した中では本当の教育は生まれない。教育とは、その1年間、そのときに知識を伝え、知識を教えたというだけでは教育をしたとは言えない。教育とはそんな簡単なものではない。難しいものなんだ。生徒が40歳になったとき、50歳になったとき、かつて、受けた中学校の教育が、昨日のここのように新鮮であり、生徒の人生を励まし続ける。何十年も生き続けるものを生徒の中に残せたとき、教育をしたと言えるんだ」と話をされた。

真民先生の声が、真民先生の表情が、真民先生の眼の輝きが、鮮やかに私の脳裏に刻まれている。真民先生の2時間ほどの話、その一言一言に、目から鱗が落ちるような、身体全身が震えるような感動が沸き起こってきた。人間としてどう生きるのか、人として何を大切にしなければならないのか、私のこれからの人生の中に明確な道しるべを示してくれた出会いであった。

坂村真民先生のことば

1 あなたには教育の大変さはわからない

あなたはそんな体格をもっている。その体格だけでもどれだけ感謝しなければいけないか。私なんかは何の力もない。あなたは柔道をやっておいでた。私は何の力も持たない。全くの無力です。無力で無気力にさせられた子どもたちに立ち向かっていく。そのことの大変さはあなたにはわからないだろう。私は公立高校を退職したあと、7年間私立の高校に勤務した。その私立高校は、公立高校へ行けなかった子どもがやる気をなくした状況で入学してくる。

その学校にはあなたのような体格をした柔道の先生がいた。その先生は生徒たちがいかに従順であるかということしか知らない。「わしの授業では悪い生徒は一人もない」と言われる。生徒の力で押さえつけられた一面しか知らない。ところがその先生の授業の次の授業では、その先生の前で

は非常にまじめでおとなしかった生徒が、次の時間、僕のような無力な教師が来るとがらりと態度を変えてしまう。そして、したい放題の状態になってしまう。

教育というのは力で押さえつけてしまうと大変な反動があるということを知らなければならない。だから、生徒は良いんだ良いんだと思っけていても、あなたのような人には生徒の本当の姿はなかなか見えない。力の教育の反動で次に授業をする先生たちがどれだけ苦しんでいるかを知らない。叱られる、恐ろしい、それだけで彼らは先生を尊敬したような顔をする。しかし、私のような教師の前では、その従順な姿ががらりと変わって授業ができない状態になる。

そのことをわかっているのか、わかっているのか。そのことが教師に問われていく。

そのことをわかり、「先生、すみません。私の授業は、次に先生が来られるとどんなに生徒が悪くなって、先生が大変だということがわかるんです。そのことを生徒たちに話すんですけど、私の力不足です」と言われる先生もいる。でもそのことに全く気がつかない先生もいるし、私のような人間を全く否定する先生もいる。私たちは生徒の内面をもっともっと考えていかなければならないと思う。

2 生徒の本質に気づかない自分を自覚する

もう一つ考えなければいけないことは、私のような人間が生徒の中にもいるということです。私のような人間というのは、小学校、中学校、大学といろいろな先生と出会ってきたけど、学校の先生を一人も尊敬していない生徒の存在です。「仰げば尊し」の恩なんて私にはない。そんな目で教師をみている私のような生徒が、今も生徒の中にいるということです。ほとんどの先生は自分が良い先生だと思っている。それは教師として当然の意識です。でも私の少年の頃、そして学生時代の私にとって良い先生はいなかった。

だから私は教師になったとき、私が少年のとき先生を見てきたような思いで、私たち教師を見ている生徒がいるだろうということを意識してきた。そして、そういう子どもたちに、僕はどう教えていくのかということを考えてきました。そのことを考えながら教師をしてきたことが、私にとってもすばらしい生き方をさせてくれたと思っています。

何より、そのことを考えていくことによって、私自身が私の差別意識と向き合って生きていく生き方をさせてくれました。そして、私はどこへ行っても差別をしない生き方を私なりに貫くことができたと思います。戦前、朝鮮で教師をしたときもそうでした。公立高校を退職したあと私立高校で教師をしたときもそうでした。先生だけは差別をしなかったと子どもたちは言いました。

私が最後に勤めた私立高校の子どもたちは傷つけられて入学してきました。「姉さんは良いが、兄さんは良いが、お前はダメだ」と言われて子どもの頃から差別されてきた生徒、高校に入学してきても、同じようなことをずっと言われてきた生徒、「お前の兄さんはあんなに優秀なのに、どうしてお前はダメなんだ」そんなことを言われながら学校へ来る。そんな状態で差別され無気力にさせられてきた生徒たちの苦しみや悲しみを知らずに、ただ力だけで押さえつけていく。その教師の押さえつけに子どもたちは屈しておとなしくなる。そのおとなしい表面を見て生徒は良いんだと言う。教師の狭い視野だけで子どもたちを判断している。そんな中で育った生徒が大人になって本当の人

間になれるのだろうか。そんなことを訴えながら教師を続けてきました。

あなたのような迫力、力でぐいぐい押してくる教師に子どもたちは権威のようなものを感じて、おとなしくしている生徒もいるでしょう。それで教育ができていると思ったら大間違いですよ。あなたはそうでないかもしれないけど、そんな教師が現実はい多いです。

そんな力で押さえつけられた生徒は、私のような何の力もない人間に対しては猛烈に自我というものを野良犬のようにむき出して来る。そんな生徒の本質に気づかない教師にどう教育のあり方を訴えていくか、私は教師をしながらそのことに苦しんできた人間です。

かつて戦前、私が朝鮮で教師をしたときに、厳しい差別を受けてきた朝鮮の生徒に対して正面から向き合っていた。その生徒たちと数年前朝鮮で再会したとき、彼らは私に語った。

「先生だけは差別をしなかった。だから50年前のことが昨日のように思い出される。」

3 教える資格がないのに生活のために教壇に立ってきた

教育というものは実に難しいものです。教育というのは14歳や15歳の子どもを教育するのではない。身体は14歳や15歳でも、50歳になったら60歳になったら、どうやって生きていくかということを見据えて、そこまで教育していかなければいけない。ただ14歳や15歳の子どもを何かうまいぐあいに教えて指導して、生徒たちも「先生、先生…」って言うから、ああ自分の授業はまあ大体良いんだらうと思ったら大間違いです。40歳になったら50歳になったらというふうにこれからの人生をどう生き抜いていくかということ、もっと言うなら死ぬまでのことを考えてこそ本当の教育なんです。

私が生まれたときは、日本は一番不況のどん底でした。だから大学を出たってしょうがない。大学を出ても仕事に就けないという時代でした。そんな状況から戦争に入っていくんですけど、そのとき僕は教師をやっていました。当時の学級は男女に分かれていて男子の5年生のクラスを受け持ったんです。そのとき先輩の先生から言われた。「Kという生徒はバカですから、ほっときなさいよ」って…。しかし、僕はこの子から教えられたんです。

その子は小学校の5年間で「あいうえお」の「あ」の字も知らない。何一つ教えられることなしに放ったらかしにされてきた生徒です。その生徒を教えたことが、私にとって本当に良かったんです。私に人間としての生き方や教育のあり方をその子は問いかけ続けました。その中で今まで気づきもしなかった世界をその子を通して知ることができました。

そして、私はその子にいろんなことを教えていこうとする中で思ったことがあります。それは、今までその子と関わってきた教師は、教師として5年間その子に何も教えなかったことに自責の念を感じないんだらうかということ。あの生徒はダメだから放っておきなさいという教育が、今もなされているように思います。

教育について私が思うことは、目の前の一人の子どもに必死になっていくことが大切なんだということです。あらゆるものから捨てられた一人の生徒ために、力をかけることができるかどうかということが教育なんだと思います。

だから私は教えるなんて言ったことがない。一度も言ったことがない。私は教える資格はないと

思ってきました。教える資格がないのに、私は家族のために、妻を養うために、子どもを養うために教壇に立ってきた。だから昨日も宇和島の先生（私が公立高校の教師だったときに、その高校の生徒として出会った人たち）に教える資格がないのに、生活のために教壇に立ってきたんだ「すまない」と謝った。

4 悲しみを知っているものが本当の人間

教育ほど難しいものはないんです。教育の理論より、まず教育にかける本当の愛情があるかどうかなんです。子どもたちを丸ごと愛し、子どもたちと共に歩いていこうとする本当の愛情があれば生徒たちはついてくる。生徒の中には僕のようにひねくれてジグザグの生き方をしてきた生徒もいます。だからこそ、教師が本物であるかどうかが厳しく問われていくと思うんです。

そんな本当の教育にしていくために、様々な困難を乗り越えていくことが必要です。人間はある意味で苦勞を乗り越えていくということが必要です。あなたは部落に生まれたということで、生まれながら部落差別という苦勞をしてきた。そのことはマイナスではなくプラスです。人の悲しみを人間の悲しみを知っているということは大きなプラスです。決してそれは卑下する必要がない。私もだれも味わうことのない差別を受けて若いときから苦しんできた。その苦しみを乗り越えていくことによって、私の人生はより豊かなものになっていきました。

仏様がどうして拝まれているか、それは悲しみを知っているからです。悲しみを知っている者が本当の人間です。キリストにしても釈迦にしても人の悲しみを知っているから慕われるんです。あなたは部落に生まれたという悲しみを知っている、それは人間の悲しみです。その悲しみを知っているということは人間としてすごいことなんです。あなたは人間として最も大切なものを知っているんだから堂々と生きて、あなたはあなた自身の存在を誇りとして、あなたの生き方や生きざまを多くの人たちに話して下さったらいいいんです。

私は父を早くになくした。そのことによってどん底の状態を生きていくようになりました。しかし、そのことが逆に良かった面もある。私はそのことによって人間を上から見るのではなく、下から見るができる人間になれた。そのことは、本当にありがたいなあと思います。価値観を変え、自分のあり方をしっかりとみつめ、明るく堂々と生きていくことが人生をより輝いたものにしてくれます。

あなたはそのような体格をなさっている。そのことがどれだけプラスになっているか。私なんかは何の力もない。その中で教えていくということは、あなたが使わないエネルギーをどれだけ使っているか。そんな私のような教師が苦しんでいることをしっかりと認識していくことが大切です。

5 新鮮な感動となっていていつまでも生き続ける教育

昨年、韓国へ行って戦前私が教えた子どもたちと会ってきました。55年ぶりにあったんです。私が教えた頃の年齢は13歳くらいでした。彼らは2年か3年前に私の授業を受けたように、私の授業を覚えていました。先生は黒板に書くときどうだったか。教室に入ってきたときどうだったかと細かく覚えているんです。彼らと55年前に帰ったような気持ちになって出会えたこと、再会できたこ

とを本当によろこび合いました。

私は思うんです。私の心の中にある悲しみや、人間としての見方が電流のように伝わっていく。 その中で人間として互いの存在を認め合う、深い信頼という絆が生まれていく。それが本当の教育だと思っんです。さっき私が言ったように教育というのは1年間を2年間を3年間を無事教えたというものではない、55年たったけど、教えた私の言ったことを昨日習ったことのように覚えている。そんな新鮮な感動となっていていつまでも生き続けるのが、それが本当の教育であり、教育の本質だと思っんです。

私は教師をして本当によかったと思っます。かつて出会った子どもたちが、今さっき咲いた花のようすやその感動を語るように、私に接して私の授業を話してくれる。教育というのは卒業したらすぐに忘れてしまうものではなくて、60歳になっても70歳になっても胸を熱くし、若さを持ち、希望と愛情を持つ。そういう人間をつくっていくことが教育じゃないかと思っます。

ある作家が良寛の生きざまを描いた。みんなは良寛と言ったら、心優しいすばらしい人だと言う。その作家はそんな良寛を違った面で描いたんです。良寛とお手玉をして遊んだ女の子、その女の子の何人かが売られていき、大変苦しんだに違いない。それを良寛はどうして歌に描かないのだろうか。良寛の作品の中にそんな歌が一首もない。その作家はそれが不思議でならないと語った。私は良寛というのは善人でこんな良い人はいないと思っていた。本当に仏様のような人だと思っていた。しかし、その作家はそうは描いていない。

自分とかくれんぼをして遊んだ女の子たちが売られていった。そんな社会であつたのに、そんな事実をいっぱい見てきたはずなのに、なぜそんな女の子の悲しみや苦しみを描かないのか。そのことが不思議でならないと訴えているんです。私はその文章を読んだとき、今までだれもそんなことを言ったことはないのに、やっぱり作家というのはすごいなあと思っました。私は良寛が好きなのに、そんなことを考えたことがなかった。なるほど、良寛は良い人で、子どもとかくれんぼして遊んで、子どもが見えなくなってもまだ隠れていた。どんなことがあつても人を疑わない人であつた。そういう人だと思っていたのに、その作家はそうではないと描いている。

今でいうなら貧農の子や部落の子であつたために売られた子どもたちです。そうした人たちの存在を良寛は知っていたのに、そういう人たちの話はどこにも書いていないのはおかしいと言っんです。そう言われれば本当におかしいと思っます。

6 人間の感性を揺さぶり、人間の真実に触れてこそ本当の教育

部落差別についても、先生方は教えているけど、その本質に気づいて授業している先生は本当に少ないと思っます。これは絶対放っておいて解決する問題じゃない。あの差別構造というのは、今の階級制度と同じです。差を付けることによって社会が維持されている。たいいていの人々が名刺を出すでしょう。課長とか、課長補佐と書いてある。小さな銀行でも支店長とか支店長代理と書いてある。補佐とか代理とか主任とか、あの人より私は上だという意識を持ちたいし、持たせたいと思っんです。

だから最後の一番どん底の人間が必要とされるんです。そういう存在としてつくられたのが部落

の存在です。そんな差別構造を維持していくことによって江戸時代は、あれだけ長い間続いたわけですからね。その差別構造がしっかりと捉えられたら、差別することの愚かさがすぐにわかっていく。

もう一つ、この差別を残しているのは感性です。知性じゃなくて感性だからそれは本当に難しい。知性なら説明すればわかる。ところが感性は、説明するだけでは変わっていかない。感性を揺さぶるというのは本当に難しいものがあります。好きでないものを好きになれというのは心の奥底を揺さぶらなければ、そう簡単には変わるものではない。「にんじん」の嫌いなものに「にんじん」を好きになれといってもなかなか好きにはなれない。

感性というのは舌の感触なんかの感覚で、その人間の中に染み込んでいる。その染み込んだものを変えていくという教育、それは本当に難しい。しかし、その心の奥底に届かないものは教育とは言わない。人間の感性を揺さぶり、人間の真実に触れてこそ、それは本当の教育と言えるんです。その意味において部落差別を始めとする様々な差別をなくしていく教育は、本当の教育ですよ。

(1989年8月・愛媛県砥部町・タンポポ堂にて)

たんぽぽのように

愚痴を言うな
弱音を吐くな
勇気と正義をもって貫いてゆけ
ごまかしはすぐばれる

タンポポの根のように
踏みにじられても
食いちぎられても
芽を出し
花をつける
強さを持つて

幸福をまき散らすというのが
タンポポの花ことばだが
自分の幸せを求めながら
人の幸せを考えてゆく
人間になれ
それをこのタンポポから学べ

傷つき倒れている
一羽の小鳥を助けてやる
善意の心を失わずに行け
零下十数度の寒冷にも堪えて咲く
この小さな野草の強さを
身につけようではないか



1989年8月 坂村真民先生
於・愛媛県砥部町タンポポ堂